

戦争・太平洋戦争」と、ほとんど戦争の時代に育ってきた。昭和から平成と年号も変わった。戦争を体験した世代は高齢となり、戦争を知らない世代が多数となってきた。二十世紀は戦争の世紀だった。二十一世紀を平和なものにするためにも、次の世代に伝えていかなければと思う。しかし、今も地球上のどこかで戦争が絶えないことは、本当に悲しい。二度とあの悲惨なことが起こらないことを願うとともに、戦争はその人たちの意志にかかわらず、幸せな人生を引き裂いてしまうものである。戦争とはどんなものであったかを、歳月と共に風化させてはならないし、多くの人たちの犠牲の上に今日ある私たちが、平和を忘れてはいけない。

## 戦争を挟んだ私の青春

長野県 塚原 節

### 一 生い立ち

昭和四（一九二九）年三月二十二日、満州国撫順市北台町に私は生まれた。大正十一（一九二二）年に渡満した父は三十四歳、母二十七歳。三つ違いに兄がおり、次に姉に当たる人がいたそうだが、緑と名付けられたままに亡くなったということ、戸籍上私は次女である。

父は満鉄経営の撫順永安台小学校の訓導であった。撫順市は露天掘りで有名だった石炭の街であり、後年修学旅行で訪れてみた壮大な景観は、まさに世界的とも言える大規模なものであって、今も眼の底に残っている。

昭和六年春、父は南満の中心地、奉天（瀋陽）の教育専門学校附属の千代田小学校に転任となり、一家は奉天市藤浪町四十五番地に転居した。市内

の一番南端にあったというが、私に思い出は全くない。ただ、すっかり黄色に変色した小さい写真が残っていて、門柱の前に若い父母とそして兄、私は眩しそうに首をかしげて写っているのが唯一の記録である。

そのころのことだと思われるが、一つだけ強烈に残されている記憶がある。両親と兄、それにどこかの人が一人いたように思う。草原のような所で汽車を降り、母に手を引かれて歩いてみると、突然足元に歯の残された人の顎が落ちていた。少し向こうに林があつて、その中に横長の黒い建物があつて、開け放された窓枠に頭と手を下にした人たちが、折り重なるように死んでいた。近くには死体が小山となつて積まれており、群がった野犬が死体を喰ひ散らしていた。昭和六年といへば、私は三歳に満たないはずだから、その前後の記憶はほとんど無いけれど、あの日の草原と足元の人の顎、窓から乗り出して折り重なつた死体、そして野犬の群がる死体の山の記憶はひどくはつきり

していて、野犬の歯音のかくかくという音までが聞こえてくるのである。幼い眼に、よほど強烈な印象であつたのだろう。

昭和九年春、五歳になつた私は、父の学校の附属幼稚園に入園した。けれどそのころ、母が肺炎を患つて転地療養をすることになつたため、一学期だけで退園することになつたので、思い出はほとんどない。ただししばらくの間だったが小さな座席で隣り合つた女の子、阿部玉子さんという子が、私の長い社会生活の中で知り合つた初めての友人である。

八月になつて私たち一家は、父の夏休みを利用して内地に帰ることになつた。前記した母の転地療養のためであり、父の妹に当たる叔母も一緒の旅であつた。途中、厳島神社に立ち寄つた。海中の赤い大鳥居を背景に、カンカン帽をかぶつた父、和服姿の母、モダンガール姿の叔母の前で、兄と私は二歳になつた弟を中にして、手を繋いだ写真が残っている。名物の鹿が二匹画面に入つており、

私は相変わらず眩しそうな顔をして小首をかき上げている。

私たち兄弟には初めての日本であったが、久しぶりの帰郷なので、父方母方の親類を回り、諏訪の地藏寺に墓参を済ませてから、知人が借りておいてくれた松本の徒士町の家に落ち着いたのは、夏であるのにひどく風の強い夜であったことを覚えていいる。間口の狭い軒の低い二階屋で、門のそばに大きな桐の木が一本立っていて、強い風に葉がひどく揺れていた記憶がある。

その夜から翌年の三月末までの約八カ月、父不在のひそやかな生活が始まった。私の記憶はこの辺りからかなり確かなものとなって、六十余年を経た今、メルヘンの世界に浸るような思いで追想できるのである、

## 二 戦時生活の想い出

私は女学校四年のころ、奉天の浪速高等女学校に在学し、寄宿舎生としての生活体験がある。当時の学校の寄宿舎は規則で縛られ、食糧は逼迫し、

加えて人間関係の煩わしさもあって、身边はいろいろと窮屈であった。

初めて親許を離れて規則に身を縛ることは、性格的に快いくらいに受け止める私であったが、空腹には何とも耐え難い毎日であった。大きな洋皿に、ありつたけ面積を広く伸ばして盛り付けられた大豆のご飯に、連日の昆布の煮付けと実の無いお汁。お弁当は蓋をしてから振ってみると、中のご飯は三分の一くらいに片寄っていた。何よりも学校から帰って来て、夕食までは何も食べる物無いということが、どんなにつらかったか知れない。

部屋では、皆が比較的物資の豊かな地方からの出身者であったせいか、よく小包が届いた。七人ほどの寮生と一緒に食べる広い食堂で、届いた小包は夕食後舎監から全員の前で呼ばれて手渡される。受け取った人は、嬉しさを隠し切れぬ様子で部屋に持ち帰り、早速音を立てて包みを開き、部屋の人たちに分けてくれるのが習わしであった。

栗、南京豆、ビスケット、干しバナナ、自家製のかりんとうなどをもらって食べた記憶がある。皆は大喜びで礼を言いながら早速に頬張り、室内はひとしきり賑わうのであったが、これもたび重なりと重荷になった。私は、両親が配給だけで暮らしているだろうことを思いやつては、たまらなく侘びしい気持ちになった。

ある日、学校から帰って来ると、部屋にはだれもおらず、所在無いままに弱い冬陽が鈍く反射している鉄製のベットに腰を掛けた途端、前の机の下に大粒の栗が一つ転がっているのを見つけた。前日、一年生の人に届いた小包から落ちたのである。拾って一年生の机の上に置くべきであろう。でも私はあのととき、三つずつ分けてもらって食べた栗の味の誘惑に負けた。思わず拾うと、爪ではぐのもどかしく口へ放り込み、だれもない部屋の中で、ゆつくりと時間をかけて栗の味を楽しんだ。そして、いつかしら卑しくなった自分自身を少し恥じた。私は思い切って手紙を書いた。

「お母さん、すみませんが、何でもいいからおやつになる物を送ってくれませんか」折り返して母から手紙が届いた。「甘えてはいけません。だれもが我慢している時代です。二度とこのような手紙を書かないように」と。私はひどく寂しい気持ちになって、一度だけ読んだその手紙を、机の一番下に押し込んだことをはつきり記憶している。

でも、それから幾日か経ったある夕食後、思いも掛けず私の名が呼ばれた。舎監から渡された小さな小包の裏に母の名を見たときの、あの震えるような嬉しさを忘れることはできない。どうやって手に入れたのか、つややかな小豆の甘納豆がひと包みと、前日辺りに母が焼いたらしいメリケン粉の厚焼きが、扇型に切られて二十枚ほど入っていた。「お部屋の人たちと一緒に食べて下さい」と添えられた母の手紙を読みながら、私は込み上げてくる嗚咽を必死にこらえ、一粒、二粒と甘い豆を口に入れてみて涙をこぼした。あのとときの甘納豆の味、香ばしい厚焼きのふわりとした舌触りを、

六十年余も過ぎた今もなおはつきりと思ひ起こすことができる。

そしてもう一つ、だれもない部屋の中で、とっさに落ちていた栗を口にしたら、あのときの自分の卑しさも忘れることはできない。

### 三 学徒動員

昭和十九年十月十日、学徒動員令により、私たちは学校を離れて、奉天郊外の皇姑屯にある満鉄の鉄道工場に配属されることになった。昨日までと全く異なつた鉄の世界、騒音とオイルの匂いの充満する中で、馴れない旋盤を受け持つてからの私たちは、ただ無我夢中の毎日となつた。御国のために、精一杯の力を投げ打つていた。

作業にいくらか馴れてきたのは一カ月ほど経つたころだろうか。機械の操作にも馴れ、隣り合つた友人と、少しは話もできる余裕の出てきたある日のことであつた。短い悲鳴を近くに聞いた。続いて慌たらしい人の足音が乱れた。大きなミーリングを受け持つていた新関さんが、機械にたまつ

た切子を払おうとしてほうきの先をバイトに噛まれ、そのまま引き込まれて、右手の親指から中指までの三本を、根元から切断してしまつたのだ。

それは一瞬の出来事であつた。呆然として立ちすくむ私たちの前を、職長さんに抱えられ、真つ赤に濡れたタオルの下から、ぼたぼたと血を落としながら連れて行かれた新関さんの、あの白ろろのような顔を、私は今でもはつきりと思ひ浮かべることが出来る。

年が明けて短いお正月休みの一日を、友だちとお見舞いに訪ねた日、思ひなしか明るく振る舞つてくれた新関さんにほつとしながらも、包帯で変形した右手があまりに痛々しく、通された部屋の隣の応接室に、白いレースをかけた大きなピアノが、窓辺にひっそりと置かれてあるのが目に入つたとき、抑えようのない哀しみが一度に吹き上げてくるのをどうすることもできなかった。

背丈を越すほどの大きなミーリング機はひっそりと止まつたままに、新関さんが再び職場に戻れ

る日はこなかった。

#### 四 たこつぼ

女学校を卒業して、東京の女子医専に合格したものの、朝鮮海峡がとても危険だからと両親に説得され、私は進学できないままに、極めて宙ぶらりんの毎日を送っていた。戦況は急を告げており、父の青年学校では先生方がほとんど召集されてしまっていたので、取りあえず私は事務員として毎日学校へ行き、言われる通りの事務処理に当たっていた。青年学校では生徒にも召集令状が届くようになり、私とあまり年齢の違わない人たちが、父の前で凛々しく挙手の礼を残して出征して行く日が続いた。

家の方では隣組を通して、供出に配給に作業にと次々に布令が届き、私たち日本人の生活は日に日に追い詰められていった。でも、折りにふれ父は言っていた。「日本とソ連の間は中立条約が結ばれているから、北から攻められることはない」と。その度に、私は広い満州国の国土を思い、関

東軍という強力な守備を心から信じた。それが八月九日の早朝、ラジオが鳴り続いたのだ。「八月九日未明、突如国境を破ってソ連軍が満州国に侵攻しました」と。次いで八月十三日朝には、隣組を通して「各戸より一人、シャベルを持って集まれ」と急の布令が届いた。私は、父の学校を休んで道向こうの低い丘に集まり、待っていた数人の兵隊さんより各々五メートルの間隔で、深さ八十センチメートルくらいの穴を掘ることを命じられた。八月の太陽の照りつける中、汗だくになった私たち隣組の人たちは、皆女性だった。若い私は短時間掘り上げたが、子連れの人たちは、どんなにか大変だっただろう。掘った穴に入って、しゃがんで見て外から見えないほどの穴、これがいわゆる「たこつぼ」であった。兵隊さんは皆を集めて、大声で命令した。「明後日の午前あたりに、ソ連の戦車部隊がこの本溪湖の街に到達すると推測される。よって明後日の朝、各自に爆弾を渡すから、それを持って各穴に入って待機。戦車が到来した

ら、爆弾もろともどどの戦車でも良いから飛び込むこと。分かったか」異様な沈黙のあと、泣き声がふくらみだした。「では明後日七時、必ずここに集まること」兵隊さんたちは皆の気持ちを敢えて無視して、厳しく言い放って去って行った。ざわめきは大きくなり、その場を立ち去る人はいなかった。「いよいよ死ぬときがきたんだ。天皇陛下のために、必ず敵の戦車と一緒に死のう」私は、ざわめきの中にあつて心の底から皇国を思い、皇国のために死ぬだろう自分を、とても爽やかに見つけていた。ひどく心が静かで、何の心の乱れも恐怖心も湧かなかつた。ただ一瞬だけ心がかげつた。「私が死んだらお母さんが悲しむだろうな」そして二日後の八月十五日、爆弾を受け取るのとなく終戦となった。

## 五 青年学校の武装解除

終戦の日の翌日、青年学校の校長であつた父は、にわか事務員の私に、「銃器庫だけは絶対に開けるな」と言い残して、今後の連絡を取るため、奉

天にある在滿教務部へ発つて行った。その留守中の出来事である。

二十人ほどいた先生方も、ここ半年くらいの間に次々召集令状を受け、加えて二十歳前後の年齢にある生徒たちにも多く令状が来たため、校内は無人に等しい状態にあつた。それに反し、隣接する小学校の校舎の方には、関東軍一と言われている前田部隊が、終戦直前に駐屯して来て、そのまま武装解除となつていたので、大にぎわいの状態であつた。階級章を外した、いわゆる丸腰の集団が、暑さのために校庭に木陰を求めてあちこちに屯して寝転んでいる様は、つい先日まで憧れに似た思いで見えていた兵隊の容姿にはあまりに遠かつた。私はただ一人、青年学校の職員室の扉を閉めて、戸棚や引き出しのものを集めては、大きな包みにまとめる仕事に専念していた。昼近くなつたとき、不意に下士官を思わせる人が入つて来て、折り目正しく言つた。「お一人の方ですが、青年学校の方ですか」「はい、事務を預かっています」

「校長か外に先生はおられませんか」「校長は連絡のため奉天に行きました。職員はだれもおりません。私一人です」「困ったな。実はご存知かと思うが、近々ソ連軍が進駐して来ます。我が部隊は既に武装解除しており、武器は全部引き渡すことになっていきます。それで青年学校の銃器庫の中には武器のようなものはありませんか」「私、中のこととは分かりませんが、絶対に開けないように校長から言われています」「ではきつと武器が入っているのでしょうか。軍隊のものと一緒に出すことを勧めますが」「でも私には判断できません」「しかし君、今は非常事態ですよ。銃器の接收ということとは想像できないほど厳しいものです。軍の方で全部提出した後で、またどこからか銃器が出てきたとなると、大変なことになります。校長の言い付けも大切でしょうが、この際一緒に出してしましましょう」その人が真剣に言っていることはよく伝わってきた。誠実な人柄に思えた。「校長はお父さんなのでですね。君の気持ちは分からない

いでもないが、しかしさっき言ったように、今は非常事態ですよ。進駐軍に処罰されることはあっても、校長の責任をとらされる力はもう日本には無いと思います。脅かすわけではないが、これはお父さんの命に関わるかもしれないと思って下さい」「……」「さあ早く、鍵はどこです」「校長机の中です」心臓の音が聞こえるほど高鳴っていた。鍵を持って銃器庫の前に立つと、既に冷静になって、その人は厳しい表情で私に言った。「君が開けなさい」「お父さん、言い付けを破ります。ごめんなさい銃器庫を開けます」と心の中でつぶやきながら、でも私はあのと手手が震えて鍵がなかなか穴に入らなかつたことを覚えている。やがて、ガチャツと鈍い音がして錠は開いた。重い扉が左右に開いた途端、ヒヤツとした空気が薄暗い中から二人を包んだことも思い出される。手探りで探したスイッチを押すと、幾箇所かの裸電球に照らした出された銃器が、整然と見事に納まっていた。「わあ驚いたなあ、こんなにあつたとはなあ、我々兵



隊たちでさえ、最近の召集兵は丸腰だったんですよ」その人は、入口に立ったまま咄然としていた。

「君、良かったよ。こんな大量の銃器を揃えたまま残しておいたら、後で大きな責任問題になったと思いますよ。いくら学校の教練用だと言ったって、進駐軍には通用しない。いや、本当に我々も助かった。じゃ、早速関係書類を出して、簡単にいいから君が数に間違いないことの署名をして渡して下さい。軍の書類と一緒にして出してしましますから」「でも私は事務員ですから」「いや、こんな場合は、下手に最高責任者の名は出さない方がいいんだ。こちらでも一応の責任者は私ですよ。ほら、このようにね」その人は、手にしていた分厚い書類の最後の頁を見せてくれた。『銃器係、元軍曹、秋田三郎』と書かれてあった。いつかしら、私の胸の動悸はかなり治まっていた。「父を救うことになるのだ」という思いがあった。私はインク壺にペン先を少し浸すと、ためらいを残すまいとしてすらすらと余白を埋めた。『三八式歩兵銃

三百挺他 事務担当 竹田節』「これでよろしいでしょうか」受け取った秋田元軍曹は、厳しく、そしてひどく優しい瞳をしてから、しつかりとうなずいてくれた。十七歳の夏の日のことであった。

## 六 混乱の中で

その日も私は父に言われたとおり、職員室の扉を締め切って、独り学校の残務整理を進めていた。生徒手帳、軍人勅諭、戦陣訓などの小冊子を、広い校長机の上に引き出しごと開けては袋詰めにしていたとき、ふと妙な気配を感じた。振り返るより一瞬早く、私は後ろからものすごい力で羽交い締めされ、引き倒されようとしていた。だれなのか、何が起こったのか全く分からない。本能的に校長机のへりにしがみつき、振り切る動作を続けながら、机に沿って必死に半周した。後ろの者は一切無言で、獣のように荒い息だけが私の首筋の辺りに激しかった。「放して！」と叫び続けていたようだが、相手の力はものすごかった。絶望に似たものを感じながらも机を半周して、ちよう

ど正面の回転椅子の背に、必死の手をかけたのがかえって不運となった。ゆらりと半回転した椅子が私の体のバランスを崩し、狭い窓際と机の間に仰向けに倒れてしまった。汗染みたシャツだけになった兵隊の醜い顔が、たちまち襲いかかってきた。もう無我夢中で手足をばたつかせ、体をねじり必死の抵抗をした。私はまだ体力みなぎる年齢であったが、男性の力のものすごさは初めての体験である。突然「ぐおっ！」と大きな奇声をあげた兵隊の、わずかの隙に夢中でよろけ立って逃れた私の体は、扉に向かってものすごい体当たりとなり大きな音を立て、弾みに二十センチメートルほど隙間を空けた。「だれか！」と叫んだと思うが、次の瞬間また襟首を掴まれて見事に引き倒され、したたか床に頭を打ってしまった。けれど神の助けがあった。「どうしたんだ」と大声とともにガラリと扉を開けて入って来たのは、階級章こそないが明らかに将校だったらしい大きな青年であった。とっさにふらつく頭を振りながら、夢中でその青

年に取りすがった私であった。「馬鹿野郎！ すぐ出て行け！」と一喝された兵は、ありつ丈の憎らし気な目を青年に向けてから、よろよると出て行った。ブラウスは襟元から破れ、三つ編みの髪の毛の片方がほどけて、ばらばらに顔にかかっていた。「こんな所で何してるんだ。ばかだなあ、とにかくすぐ帰りなさい。家は遠いんか」「いいえ」「じゃ、すぐ帰りなさい。そして、もう来てはいかん」と怒ったように言った。「本当にありがとう」と口を押さえながらいる私を見るに忍びなかったのか、戸口に立って後ろ向きのまま「いいか、すぐ帰るんだよ。後のことなんかどうなってもいいんだ」と大声で言うてから去って行った。私は、軍旗そっくりの校旗だけ袋に入れると、再び来ることはないであろう青年学校の職員室を出た。終戦後四日目の出来事であった。

## 七 拉致されて

八路軍が本溪湖の街から撤退するらしい、との

うわさが流れ出した、ある朝のことである。朝食の後片付けに流し台に立っていたとき、不意に裏口の戸が開き、八路軍の将校が入って来て、ちょうど部屋から出て来た父の胸に銃を当て、続いて入って来た若い兵隊が私の後に立った。一瞬とも言える出来事であった。将校は流暢な日本語を使った。「我々は間もなく移動します。ついては看護婦が必要です。お宅の娘さんを連れて行きます。いいですね」「どこへ」と父が叫んだような気がする。が、問答無用の空気であった。「私行くから心配しないでいいから」父にと母にともなく私が叫ぶと、「何も要りません。そのまま来て下さい。急いで下さい」と、ひどくせかされた。柱に寄りかかって、かろうじて立っていた母に、私はそつと言った。「逃げて来るから。絶対に死んだりしない」と。ちょうど炊事場の棚に置いてあった私の小さな財布が目にとまり、何となくポケットに入ると、押し出されるように外へ出た。呆然と立っている父の姿が、瞬間目に入った。

将校と兵に挟まれた形で宮原駅の近くまで歩き、戦争前は日本の何の建物だったのか、平屋のかなり大きな建物に着いた。にわか作りの扉に鉄条網が張られ、仁王のように大きな歩哨が門に立っていて、しろりと私を見たのを思い出す。「ここでしばらく待っていないさい」と言いながら、将校は入ってすぐの扉を開けて私を押し込んだ。少しのめつてから気付いた部屋の中は、暗幕が下がっていて真つ暗であった。しかし、かなりの人いきれを感じた。時間の経過も分からないが、一時間ほどに思えるころ、一条の光の帯と共に扉が開き、「皆出なさい。戸口の所で二列にならなさい」と大きな声が出た。比較的入口の近くにいた私は、自然の流れに押し出されて明るい場所に出ると、両側に待っていた兵隊たちが、持っていた荒縄で一メートル間隔ぐらいに私たちの右手首を順々に縛っていた。向こう側を見ると、あちらは左手首を縛られていた。

かんかん照りつける太陽が、広いアスファル

トの路面に反射する中を、数珠繋ぎにされた私たち二列の行列は、兵隊たちに意地悪くせかされながら歩いた。両側からわけの分からない中国語が飛び、ときどき野菜屑のようなものが飛んできて、わざとらしい高笑いの声も聞こえた。逃れる術のない着のみ着のままの私たちは、目のくらみそうな暑さの中を、隣町本溪湖まで約二時間歩かされたのであった。街境の大きな橋を渡ったとき、ふつと「逃げられるかもしれないな」と思った。

行列が着いたのは、本溪湖駅にすぐ近い元病院で、門の所で次々と縄をとかれ、建物の二階に追い上げられた。だんだんと扱いが荒くなっていくのが不気味であった。部屋の入口に立っているのは、さつきと同じ仁王のような兵隊だった。「午後

の汽車に乗ります。それまで待つていなさい」将校が来て大きな声を出した。ざつと見て百人ぐらいの私たちであり、側に何となく近寄っている人を見たら、すぐ近所の下級生斉藤すみ子であった。でも私は、何より逃げ出すことに必死で頭を巡ら

していた。汽車に乗せられてしまえば最後だと思うと、気が焦った。ポケットの中の財布をそつと開けてみたら、一円三十三銭入っていた。心を決めた。「あなた、私逃げるつもり、どうする？」「連れてって」すみ子の眼は必死だった。「じゃあ、私のする通りにして。私は何も声を掛けないからね。でも失敗するかもよ、いい？」すみ子は大きくうなずいた。仁王のような兵は、ときどきならみ回しながら立っていた。そのころはかなり使えた中国語に身振りを加えて、財布の中を見せながら私は仁王様に言った。「朝食を食べていない。大変空腹。前の道に出てマントーを買って来たい」しかし、仁王様はじろりと見下しただけだ。「お願い、二人を買いに行かせて」仁王様はまた穴のあくほど私の顔を見つめていたが、突然大きな声を出した。「快走（早く行け）！」「謝々」二人は舞うように階段を駆け降りて走ったが、衛兵所でまた銃を向けられた。私は同じ仕草を繰り返し、哀願の眼を向け、「快走」の声と共に走り出たが、四人の

衛兵の中の一人が、妙にいやな眼つきだったのが気になった。

門の外は満人街特有のワンワン市場で、マントーが湯気を立てていた。「品選びをするふりをして角まで行くから。角に来たら走り出すから」口早にすみ子に伝えると、私は後ろを意識して大袈裟にマントーを持つたり置いたりしながら少しずつ移動し、五軒目の角に来たとき、ぱっと角を曲がって走り出した。とたんに「ハイパー！」と、衛兵の待つていたような怒声と共に、何発かの銃声を聞いた。もう夢中だった。角があるごとに、左に折れ右に折れ走った。すみ子もすぐ後を必死に走っているのか、ひどく苦しい呼吸が聞こえた。何としても、逃げ延びなければならぬ。背中を撃たれるかもしれない。足がもつれ頭の中が混濁してきたころ、満人街の外れに来た。街を出てしまふと、もう障害物はない。もし、追っ手が続いていれば助からない。でも追っ手は来なかった。銃声はその後幾度か聞いたが、いつか遠くなった。

逃げ切れたらしい。どのくらい走り続けたのか、やがて街境の橋に来た。私は渡らずに土手下に飛び下りると、伸びている茅のような草むらをかき分けて倒れ込んだ。「少し休もう。多分もう大丈夫だよ」とすみ子に言うのと、後は独りになりきって眼を閉じた。「よく助かったな」「駄目かと思つたな」「よく追うのを止めたな。奇跡かもな」など、途切れ途切れの思いが行き来した。放心の時間はどのくらい続いたのか。やがて川の流れの音が分かるようになったとき、私は自分をしっかりと取り戻した。そしてすみ子に声を掛けた。「さっきこの橋を渡ったときは、もう帰れないかもしれないと思つたわよ」だが、すみ子は死んだように目を閉じて答えはなかった。二人が家にたどり着いたのは、静かな夕暮れどきであった。

さて、その夜母がそつと明かしてくれた大切な話がある。私が連れ去られた後、父は狂つたように家の中に分散させてあつたお金をかき集めて風呂敷に包み、私たちの後を追つたそうである。姿

が見えたときは、あいにく門に入るところであつたという。父は衛兵の所へ行き、風呂敷包みを衛兵の足許に置き、土下座した。「今入つて行つた大きい娘、お下げ髪の娘がもし逃げたときは、どうか頼む、見逃してくれ」と必死の中国語と身振りで頼み、金包を捧げるように差し出してから帰つて来たそうである。

思つてもみなかつたことであつた。聞きながら私は想像した。石ころだらけだつた鉄条網の門の横に、仁王のように立っていたあの衛兵の足許に、何度も何度も手をついて頼み込んでゐる父の姿を。金包を置いて帰つて来る父は、幾度も幾度も振り返り、頭を下げたことだろう。そして私は思い当たつた。二階の部屋の出口で仁王様が、穴のあくほど私を見つめたことを。「快走！」と叫んだのは、父への最大の仁義であつたのだろうか。自分の判断力と勇気で逃げ切れたと思ひ込んでいた私は、ひどく恥ずかしさに似た思ひに沈んでしまつた。私は、ここ一番というときに示す男親の、ほとば

しるような強い愛を全身に受けて、六十余年経つた今も、ときどき宝石を取り出すような思ひで顧みるのである。

## 八 母国へ

### (一) 乗船

陽は西に傾き、日没も近い。今せわしい乗船を完了して、しみじみとした気持ちで船のデッキに立つ。寂しい葫蘆島の港ははや黄昏で、見渡せば果てしなく日本へ続く水路が開けているのだ。連なる低い山脈に、今真つ赤な夕日が落ちようとして、差し迫つた周りの空気に投げつけるかのようにな、最後の光を発散している。真つ赤な大きな血で彩つたような夕日。その光を全身に浴びながら、今日までの波多い歳月を思い起こしていた。船内から出てきた人たちで、いつかしら甲板の上はいっぱいだ。

思えば大陸満州に生まれて十七年。遠く幼い日の思ひ出も、印象の数々も、復讐も、すべてこの大陸での過程であつた。省みれば、なんとという尊

さに満ちた十七年の歳月であつたらうか。生涯を日本人として大陸に生き、満州を眞の郷土として生い立ってきたのだが、終戦となつてあまりにも無残に切斷されてしまった。苦悩と迫害と狂おしいほどの焦燥。何の希望すら与えられない惨めな現実の世の中で、ただ夢中だつた私たち。道を歩けば、どこからか飛んでくる石の飛礫。兵隊たちの眼を逃れてさ迷つた夜の山。銃剣の前で、死の淵に立つて見つめた宵闇の中の八路兵の顔。赤い夕日は止まることなく、恐ろしかつた記憶の断片を次々に映していく。それにしても、何という赤さだらう。血のように見えるその色は、これまでに大陸で命を捧げた尊い英霊の姿を呼び、また日本に帰ることなく無念の中に死んで行つた、多くの同胞の慟哭も伝えてくる。さようなら、大陸満州。そして赤い夕日。再び訪れる日があるなら、それまできつと燃え続けてくれるように。静かに念じて再び見開いた視界の中に、赤い夕日は沈んで行つた。今日の夕日。満州最後の夕日の色を、

いつまでも脳裏に刻んでおこう。決して忘れはしない。

## (二)潮路

昭和二十一年九月四日。引揚船V2号は、あふれるばかりの感激を乗せて、母国に出発した。行く手に広がる大きな海。はるかなる水平線の彼方には、日本が待っている。私たちの心は躍る。けれど、少しずつ遠ざかつていく満州大陸の山陰に、躍る心も後へひかれる思いが強い。

いつかしら昇つた上弦の月が船の真上にあり、静かな波の上を船は確かに進んで行く。そのとき、どこからか流れてきた横笛の音。荒城の月の調べだつた。ああ、だれもが一樣な感慨にふけつていいのか。その哀調は高く低く、船側によりかかつて夜の詩興を味わう人たちの胸を衝く。知らぬ間に、熱いものが込み上げてくる。ふと、三日間を過ぎた葫蘆島の収容所が浮かんできた。

戦時中は日本軍の兵舎であつたのか、私たちの団体が収容された大きな倉庫の向こうに、黒煉瓦

の細長い建物が三棟並んでいた。こちらの喧騒に比べ、妙にひっそりとした雰囲気にひかれて行つて見たものは、建物内の中央の通路の両側に、各々左右の窓に頭を向けて、ほとんど裸に近い人たちがぎっしりと横たわっていた。動きは全く無かつた。窓越しに覗いたすぐそばに、小さな子供が動かない大人の上に、覆いかぶさつたままになっていた。一目散に駆け戻つたものの、眼に焼きついてしまつた悲惨な集団の姿は消すことができなかった。遠い道のりを、大人も子供も必死になつてたどり着いたのであろう。そして力尽きた人々。

日本に帰り着ければ、各々に待つてゐる人がいるだろうに。だれに看取られるでもなく、名前すら記録されることもなく、死ぬしかなかつたあの集団が、また暗い海面に浮かんできた。たまたまなく悲しかった。そして独りで泣いた。

ぐつと感じた大揺れに続き、船が急に左に傾いた。激しく響く非常の鐘。不気味な汽笛。出航して五時間ほど経つたろうか。船は大きく左に旋回

しているらしい。二度、三度、また長い汽笛を流して、進行し始めたようだ。平和な朝が訪れた。すし詰め船室に何も知らず目覚めた私たちは、昨夜投身自殺があつたと知らされた。奉天から一人で乗船したというお爺さん。身寄りのない心細さにか、暗い海に沈んで行つた人。なんで日本の地まで行き着かなかつたのか。あまりに可哀想で、また泣いた。

ただっ広い黄海に出る。見渡す限りの大海原である。その果てしない水平線を見つめてみると、いろいろのことが頭の中を駆け巡る。同じ学窓に語つた友も、既に幾人かは同じ思いで海を渡つただろう。親しかつた忘れ得ぬ友だちを思うと、抑えきれない哀しみが襲つてくる。どうかきつと無事であるように。きつと、皆日本に帰れるように。そしてどんな試練にも負けないで生きていくように。一生の間に、いつかきつと会える日が来る。生きてさえいれば、会える。元気で生きてさえいれば。



二日目の夕方あたりから、疲れも癒えてか、父も船室から上がって来た。父にも母にも本当に苦勞をかけた。年頃の私を守るために、どのくらい神經をすり減らしたことだろう。急に老いて見える父母の後ろ姿に、しかし安どが漂っており、平和で幸せだった遠い歳月がよみがえってくる。全ての家財を失い、リュックサック一つになった私たち家族を、これからの歳月はどのように導いていくのか。内地の様子を私たちは全く知らない。父母には懐かしい郷里であるが、幼いころ墓参に帰国しただけの私は、あまり馴染みはない。ただ、祖国母国という何とも温かい優しい言葉が、感覚的に心を包んできて、日本にさえ帰り着けば、迫害という恐怖心は無くなるのだから、父母に心勞掛けた分まで全力で働こう。私の持つ若さを精いっぱい投げつけて、両親の力になろう。どんなことでもやるぞ、と決心のようなものが心にいっぱい広がっていった。

三日目、船は刻々と母国に近づいて行く。期待

する故郷はどんなだろう。各々の人に今まで以上の苦勞が待っているのかもしれない。でも母国こそ安住地として、長い苦難を越えて来たのだ。命あつて帰国できることがどんなに幸せなことか。またしても、葫蘆島の收容所で死んでいった人たちのことを思つて泣けた。

思いなしか、海の色に緑が増した。時折、銀色の魚が船に寄つて来る。遠く水平線にあつた小さな島影が次第に近づいて、感激の母国の島は私たちを緑で迎えてくれた。すべての人が甲板に上がり、折り重なるように船側に寄つて、皆の感激は嵐となつて沸き上がった。隣り合った人がただ抱き合つて、男の人も子連れの人もみんな泣いていた。輪になつて小躍りしながら手放しに泣く人たちもあつた。そして、流れる涙を拭きもせず、島影に向かつて手を振る父と、声を上げて泣く母の姿に、私も泣いた。

大陸を離れた三昼夜。今日まで苦勞を共にしてきた人たちとも、上陸すれば北海道へ九州へと、

ちりぢりの別れが待っている。水路を平和に送り届けてくれた引揚船V2号とも永久の別れとなる。港での別離の悲愁は、どんなにか大きいことだろう。

博多港の黄昏時、静かな港町ははや夕闇に包まれて、顧みる海面は遠く霞んで、はるかな水平線の果てにある満州をまた思う。

すべては終わった。待ちに待ちこがれた月日の一星霜、今宵仰ぎ見る故国の月影に、無量の思いをめぐらす。苦難の地、本溪湖の街を出発して十七日目の夜であった。

## 九 再出発

昭和二十一年九月、引き揚げて来て大和の家に落ち着いてから間もなく、父は庭にヒマラヤ杉の若木を一本植えた。成長の早い木であるという。五十歳を過ぎてから人生の再出発となった父には、感無量の心境で、もろもろの思いをその若木に託したのだろう。

五間ある二階建てのこの家は、大正末期に渡満

した父が、年老いた両親のために建てた家で、もちろん私にとつての祖父母は既に故人となっていたが、上の部屋にも下の部屋にも、東京から疎開していた親戚の家族や、一足先に中国から引き揚げて来た叔父一家が住みついていて、家の中は大賑わいであった。父の伯父夫婦は、家主が帰って来たということ、私たちに一番奥の客間を空けてくれた。

物の無い、食べる物の乏しい生活が始まった。長いこと小学校の教員をしてきた父は、ある日、「今日から商人になる」と言って潔く変身し、種々とルートを求めて動き出した。引揚げのときの古い洋服をまといつてリュックサックを背負い、諏訪湖のワカサギを松本の方へ売りに行くことから始まった。見事な変身であったが、私には小学校のころどこへ転校しても校長先生だった父、白手袋をはめて御真影を奉戴し、教育勅語を奉読した在りし日の姿が浮かんできては、哀しい思いを抑えきれないでいた。

私は一年前の春、女学校卒業と同時に、当時の帝国女子医専医学部を受験して、合格通知を受けてあった。空しい一年間を過ごしてしまっていたが、その合格通知書だけは大切に持ち帰って来たので、取りあえず問い合わせたら、一学年下の級に入学の手続きをとるから、なるべく早く出頭するように、との連絡があった。でもどう考えても、お金もない、食物もない、洋服もない、ないないづくしの引揚者の生活の中から、自分だけ抜け出して上京するなど、できることではなかった。小さいころからの希望であった医者になる夢は、かくして消えた。

先の定まらない生活は、本当に空しいものであった。朝、母と一緒に父を送り出した後、私は配給の列に並んだり、雑穀の粉で厚焼きを焼いたりして日を過ごしていた。そして、大和の村の夕日に照り映える柿の実の美しさに、わずかに心を和ませていた。

湯小路に住む叔母がよく訪ねて来ては、不自由

で日本の生活に馴染めないでいる私たちの生活に、何くれと世話をやいてくれた。父がとても頼りにしている叔母であった。

ある日、叔母は自分の義理の息子を連れて訪ねて来た。私をその人と結婚させてはどうかという考えであったらしい。色の白い気の弱そうな青年であり、その後二度、三度と夕方になると訪ねて来たが、私には全く現実感が持たず、そのことはやがて流れてしまった。

引き揚げて来て一カ月ほど経ったとき、私は父に言われて、松本の女学校に面接を受けに行くことになった。思ってもみないことであった。女学校には教員養成の三年制の専攻科があり、女子医専の入学許可書を持参して、「転入という形で特別のご配慮を」とお願いしたということであった。私の全く知らない所で、父は一生懸命私の行末を心配し、奔走してくれていたのだ。

当日、私は久しぶりに晴々と、そしてかなり緊張して松本高等女学校の校門をくぐった。廊下を

走る生徒たちのざわめき、始業のベルの音、どこかで流れているピアノの音。あるとき私は校長室の前に立っていて、何とかしてもう一度学窓に帰りたいと、狂おしいまでの気持ちを抑えかねていた。校長室には三人の方が座っておられた。中央に大森校長先生、右に北沢専攻科主任、左に一学年担当の松平先生。勧められるままに、少し離れた前に置かれた椅子に腰を掛けたとき、あまりにみすばらしい装いをしていることで、顔が上がらなかつた。従妹に借りて履いて来た革靴の中にちぢこまっている足指が、そんなとき痛み出した。

「竹田節さんですね。随分ご苦労をされたでしょう」真ん中に座っておられた校長先生の声を聞いたとたん、抑えていたものが込み上げてきて、喉の奥がぐつと音を立てた。「あなたのこれまでの志とは異なる道を進むことになるわけですが、それでよろしいですね」最後に校長先生がおっしゃられたとき、私は立ち上がって心から長い長い最敬礼をした。嬉しくて、有り難くて、涙いっぱい

になった顔を上げることができなかつた。廊下に出て、再び聞こえてきた先刻のピアノの音とざわめきが、今度はあふれてくる喜びに代わって、私の胸に満ち満ちた。かくして、諦めていた学窓生活に戻れることになり、二年半のかけがえのない学生生活が始まったのである。

でも、私は決して忘れない。あのどん底ともいえる引揚者の暮らしの中にあつて、なお私に夢を与え、道を開いてくれた父の深い深い愛を。あのみすばらしい装いをしてワカサギを背負った父が、どのようにして校長室を訪ねてくれたことか。私は父のため、母のため、どんな苦労でも共にしようとう心に誓った。それと共に、前例はなかつたであろう私のような存在の入学希望に、英断を以って迎え入れて下さった大森校長先生の厚い御恩を、生涯大切に心に抱いていようと思つたのである。

#### 十 観光市場

上諏訪駅近くに観光市場が誕生した。私たち家族にとっては、諏訪での再生の場であつた。にわ

か商いの私たち一家は、父が仕入れて母が店番。当時、松本へ汽車通学をしていた私は、貴重な運び屋であった。父は種々なルートから雑多に物を仕入れて来て、私に託した。芋飴、芋あんのお饅頭、卵、凍豆腐、藁草履、石鹼、荷札、ノート、鉛筆等々。運び屋の私はいつも思った。「どんなに重くても良いから、かさの小さい荷であることを」と。乾きの悪い固形石鹼はかなり重かったけれど、裁縫箱を抱える姿勢で運んだ。藁草履五十足など持つ日は、鞆一つで身軽に通学する友人が、どんなに羨ましく思ったかしない。

五時の汽車で上諏訪駅に着くと、私は託された荷を持ってまっすぐに店に行つて、母と代わつた。物のない時代だったが、割烹着だけは真っ白にして身につけた母が、足重く帰つて行く後ろ姿が、かわいそうでならなかった。母と代わつて八時ごろまで、また交代に来る父を待つ。卵などは、仕入れただけ売れた。平均して売れるのが芋飴であった。十円、二十円と、ときに百円分などと言わ

れたときは、嬉しくて紙袋に入れる手先が震えたものだ。滅多に売れない物もあったが、それはそれなりに店先の賑わいになっていた。ベニヤ板で仕切った台に何でも並べていたので、通る人には見やすかつたろうが、一坪の店内に隠れる場はない。道向こうには昔ながらのお土産店、薬局、お菓子屋さんが並んでいて、ガラス張りの店が何と豊かに見えたことか。風に舞い上がる土埃にはたきをかけながら、うつうつとしている惨めさが抑えきれなかつたのは、父も母も同じだつたらう。

週に一度の割に回ってくる泊まり番の夜は、十時ごろ父が来る。「『苦勞』の一言を背に受けて帰つて来る道々、板戸をきしませながら店じまいをしていた父の姿が浮かんできて、夜更けてまでも悲しかった。それにしても、今のように七時ともなれば戸を下して静まり始める街と違い、十時ごろまでは申し合せてやっていたから、わびしい裸電球も軒並みに連なると、結構街は明るく賑わつて、大抵の店はガラスケースを置くようになつ

たころは、店並みは相当に活気に満ちていた。あの国道沿いの溝の上に作られた棟割り長屋の店を根城にして、たくましく生活の基礎を築き上げていったエネルギーは、無形ながら大きな遺産となって私の心にも残った。そして、引揚者の名の下に、精いっぱい働いた父母の姿を、私は決して忘れない。

## 十一 運び屋

専攻科時代の二年半を、私は毎日上諏訪から松本まで汽車で通った。片道二時間近くもかかる満員に近い汽車での通学は、それ自体決して快適なものではなかった。加えて当時我が家では、引揚者として再建のさなかにあり、教職から一転して商人となった父の下で、母も私も必死の毎日であったから、父の配慮で学窓に戻れた喜びを噛みしめながらも、父の扱う商品はもとより、危険な闇米運びを常習とした。朝六時十五分発の普通列車は、父や私を含めたたくさんの闇屋が乗っており、さらに塩尻辺りからは通勤通学列車となったから、

託された荷物の処置は毎日大変であった。行きがけに運ぶ商品は、近所の家内工場で作られているさなぎ石鹼が主で、松本駅に着くと、駅前の走川さんという便利屋さんを中継所として届けておき、帰りには必ずまた立ち寄って、父が用意してある様々な商品を持ち帰るのが毎日の習いであった。

松本駅一番線から出る三時半発の帰りの列車は、市内の多くの学生が乗り込み、ことに塩尻までは相当に混雑した。いつからともなく、前から二両目に乗る習わしとなり、他校の人たちを見回してみても、顔触れは大体決まってきた。

父から米運びを頼まれた日は、六時限目を十五分ほど早退して北松本の駅に急ぐ。大糸線の電車に飛び乗って三つ目の駅、梓橋で降り、その電車と豊科で交換して来る上り電車が戻って来るまでの二十分間に、私は大活躍をするのだ。母の生家は小走りで八分、伯母が用意しておいてくれる五升の米はみかん箱に入れて風呂敷包みとなっており、毎度のことなのであいさつもそこそことん

ぼ帰りをするのだが、帰り道の五升の米は重かった。田圃越しに駅は見えていても、足がもつれてきて、土手の上のホームに最後の力をふりしぼって駆け上がるのと、電車が入って来るのといつもほとんど同時であった。恵まれていた私の若い体力にも、限界を感じるひとときであった。二年半の間にとのぐらいの米を運んだことか、でも不思議と米で捕まったことは一度もなかった。

運び屋の私にとって、忘れきれない無残な日があった。特別大きな面積の風呂敷包みを託された日のことだ。いつもの車両で近づいて来た警察官が言った。「その包みを見せなさい」瞬間に私は全くつまらないことを言ってしまった。「お米ではありません」「何でもいから開けなさい」学生たち衆目の中で、何と残酷なことを言っているのか、その警察官は気づかないのであろうか。観念した私は、周りの学生に小声で少しよけてもらって、その日何が入っているか分からない、座席に押し込んであった風呂敷包みをゆっくり開けた。中に

は芋餡の焼饅頭がぎっしりと並んでいたのである。「うへっ、うまそう」「食いてえ」この二言だけが確かに聞こえた。あとは頭の中が、がーんとしてしまっただけだ。詰まりそうな呼吸を整えながら立ち上がった私は、あのとぎどんな表情をしていたことだろう。警察官が去り、辺りの不自然な沈黙がいくらかとけた中で、再びしやがみ込み包みを直すと、今度こそ立ち上がるのがつらかった。

翌日から、荷物のある日は決して二両目に乗らぬことにした。後部車両を転々として、いつも後ろ向きに立って上諏訪までの二時間を独りで過ごした。後で知ったことだが、どこかの男子学生から「彷徨狂」と名付けられていたという。大きな荷物を持って、いつもあちこちさまざま迷っていたからだとか。

## 十二 学生時代

思いがけず始まった私の学生生活は、かなりハードできびしいものであったが、胸の中は希望に満ち満ちていた。どこかの小さな会社の事務員に

でもなるのかと思っただけに、夢は限りなく膨らんでいた。でも現実の生活は差し迫っていた。まず、着る洋服もなかった。私は湯小路の叔母からもらった男物の古いセルの着物をほどこき、茄子紺のみやこ染めを買って来て、小さなお釜の中で時間をかけて染め上げ、ミシンのないままに一針一針返し縫いをして制服の上衣を縫い上げた。面接の日にもらった、松葉の中に専攻科の専の字の入った校章を襟に付けてみて、独りで感動に浸った。次に、履物に困った。戦後間もない時代であったから、皆一様に質素ではあったけれど、ほとんどの学生が、男子も女子も下駄を鳴らして歩いている中で、さすがに藁草履は一目をひいた。しかも諏訪―松本間の車中、そして松本の街中を歩くのだ。藁草履はひたひたと音も立たず、それを良いことに、私は何食わぬ顔をして履き通した。

昼食にも苦労した。粉の厚焼きを持って行ける日以外、週のうち半分は昼食を抜いた。「ちよっと親戚の家まで行って来たいから」とか何とか言っ

ては昼時間教室を抜け出し、校庭の一番隅の土手に寝転がって、昼休みの四十分をよく過ごした。あのころの、仰向けになって見ていた視界いつぱいの空の青を、私はいろいろの意味で生涯忘れない。

たまに衣料の配給がくる時代であったが、シャツとかブラウス布とかを、級友たちは皆私に回してくれた。入って間もないころにもらった、白地に黒とエンジの星形をプリントした布は、手作りのブラウスとなつて卒業の日まで大切に着了。半年遅れて入った学窓であったが、家庭科専攻の学校であったから、あまり苦労なくついていくことができ、食物、育児、被服、経済等々細かく分かれていたけれど、ノートさえしつかりとつていれば、あまり問題はなかった。困ったのは、週二時間間の選択課目の英語。戦争中を過ごした私は、女学校一年のときABCの基礎を習っただけで、続いているものが何もなかったのである。突然に「マ―チャントオブベニス」などと言われても、途方



に暮れるばかりであった。

ある日の放課後、職員室に英語担当の河野先生を訪ね、「どうしてもついていけません。どうかお見逃しを」と、散々頭を下げてようやく免除してもらった。

担任の松平富美先生は水戸出身のお家柄で、奈良の女高師を出られて以来、ずっと独身を通されて、お父様とお二人で静かに暮らしておられた。学問一筋の中に人間的愛情豊かな方で、貧しく過ごしていた私をさり気なく励まして助けて下さり、奨学金の手続きも取って下さった。小袋を集めるご趣味があり、折りにふれ頂いた皮の小袋を三つ、今も大切にしまっている。

経済担当の横山綏子先生。一級上の学年担任でもあり、東京女高師を出られたアカデミックな方でありながら、ぐつと親しみやすく、講義中もユーモアにあふれ、私が深く敬愛した方だ。後年、私が高校の教師となり、はからずも母校へ研修に行ったとき、両手を広げて迎え入れて下さったあ

のときの笑顔を、私は忘れることができない。

三年になったとき、松平先生が静岡大学に招聘されて行かれ、そのあと受け持ちとられた鈴木律子先生は育児担当で、最終学年の一年間を、卒業後の進路へ向けて細やかにご指導下さった。

もう一方忘れられないのは、滝沢厚校長先生。御恩になった大森栄校長先生の後に着任された方で、私が持っていた学校長というイメージを大きく変え、開かれた学窓というものを心から感じさせて下さった方だ。私たちはよく二人、三人と連れ立っては校長室を訪ね、種々なお話を聞き、先生の人格に触れることができた日々をたまらなく懐かしく思う。「知識よりも英知を求めよ。英知とは、与えられた実生活を真剣に処する所に存在する」この言葉は、終生私の心に残るであろう滝沢校長先生の言葉である。

運び屋、アルバイト、学友畑の開墾。教生実習等々、目いっぱい動いた歳月は、本当に「精いっぱい」の語に尽きる。

巣立ちの日。私は卒業生総代の榮に浴した。貧しい中にひたすら頑張った、ご褒美の意味もあつたらうと私は思う。卒業生として入場して来たとき、紋付きの礼服にあふれる父母たちの中に、あのみすぼらしい引揚げのときの服を着た父が、隅の方に背筋を伸ばして座っていたのを、私は確かに見た。そして、今の父の心境がじーんと伝わってきて、ステージに立つ滝沢校長先生の顔が、涙で見えなくなつた。

私にとって学窓最後の卒業式唱歌は、『ベートーヴェン第九歓喜の歌』の合唱であつた。四年前の昭和二十年春の女学校卒業の日、悲愴感の流れる講堂で、『海ゆかば』を合唱したあの日に比べ、何と明るく希望に満ち満ちた卒業の日であつたらうか。私は背を伸ばし、胸いっぱい思いを込めて歌い続けた。

### 十三 あとがき

夢中で過ぎた戦後は六十余年を数え、苦難の記憶は懐かしさといとおしさを伴って思い出される

ようになった。今、ささやかながら平和な生活の中にある自分を思うと、終戦前後の満州で、たとえどんな苦難に遭つたとしても、命あつて帰国できたというかけがえのない幸せが心にしみる。それだけに、取り残され棄民となつて果てた多くの人たちの無念さが迫り、同じ満州に住んでいた者として、抑えきれない悲しみと怒りが込み上げてくる。敗戦後の満州について語り継がねばならない実態は、そのまま戦争の凄まじさ、惨さ、哀しさ、そのものであると思う。

そして、私の心から消えない戦争孤児と言われる人たちのこと。あの、年齢よりずっと老いて見える人たち、親の顔さえ知らず、記憶すら定かに持たないあの人たちこそ、悲惨な戦争が残した生き証人である。また、戦争孤児という意味さえ知らず、そのために無関心さがあふれている今の時代に生きる人たちに、孤児たちがどんなに哀しい人生の出発をしなければならなかったのかを、思いやってもらいたいと思う。私も思うばかりで何

もできないが、せめてあの人たちの上に少しでも幸せがくるように祈らずにはおれない。

私の体験など、苦難というにはあまりに序の口に思えるけれど、伝えたいと思う過去はたくさんある。無念のうちに果てた多くの人たちへの鎮魂の思いを込めながら、少しでも語り継ぐよすがとなればと思いつながら、書き綴りました。

## 私の引揚げ体験記

石川県 辻 美代子

私は、大正五（一九一六）年七月十一日に、当時の石川県江沼郡山代町（現在の加賀市山代）で生まれ、九人の兄妹姉弟の三女として育ちました。家は代々持ち山も少々ある材木屋で、父は樵きこりと一緒に毎日山に出掛けていました。

仕事熱心な父と、家事と育児を一手に切り盛りして、多忙ながら教育熱心な母、それに仲の良い兄妹姉弟に囲まれて、貧乏ながらそれ相応の平和な生活で過ごしていました。特に母は、学校での教育参観日には、多忙な家事の中を時間をつくって、必ず子供たちの授業を見に来ていました。

姉二人は女学校に進学しましたが、私は妹や弟の世話をするために、女学校に行くことはあきらめて、和裁の勉強をしながら家事を手伝っていました。家で消費する漬物や梅干などは、全部私が